妖女のごとく

遠藤周作

講談社

妖女のごとく

遠藤周作

講談社

妖女のごとく
昭和六十二年十二月五日　第一刷発行

著者——遠藤周作
© Syusaku Endo 1987, Printed in Japan

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—三—二　郵便番号二三　電話東京(〇三)—六四五—二二一
印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——株式会社黒岩大光堂
定価——一二〇〇円
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-202875-1(0)　(文1)

目

次

好奇心は危険だ (一) 7
好奇心は危険だ (二) 36
渦に近よる 63
一歩、入ってみて…… 87
医師 109
秘密のひとつ 135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生れ変り　157
エリザベート・バートリー　180
女医の告白　201
宮沢医師の手紙　225
闇のなか　(一)　246
闇のなか　(二)　270

装画　中原　脩
装幀　山崎　登

妖女のごとく

好奇心は危険だ　(一)

どんな人間も生涯に一度は白昼夢のような体験を持つのか、どうか、私は知らない。

だがこの二年に起ったことは、私にとってまるで奇怪な白昼夢のようだった。眼がさめたあと、体が冷汗にぬれているのを感じながら、たった今、目撃したすべての出来事が果して夢だったのか、それとも現実だったのか、まだ朦朧(もうろう)とした意識にははっきりとしない——あの感覚が今だに私にはつづいている。

そして私はこれを誰にもうち明けることができない。

むかし、ある本のなかで、こんな言葉を読んだことがある。それは「人は誰でもそれをうち明けるくらいなら死んだほうがましだと思うような秘密を持っている」という言葉だったが、私の体験したことは、まさに「それをうち明けるくらいなら死んだほうがましだと思う」秘密なのであろう。

だから私はこれを誰にも見せないノートにひそかに書きつけておく。それを書くのは、私が経験したことが決して夢ではなかったことを自分に証するためである。

あの葉書が来たのは私が下宿している千駄ヶ谷の銀杏の街路樹がすっかり金色になり、風の強い日で歩道が黄金の枯葉に埋っている秋の一日だった。

「平生はおたがい多忙にまぎれて御無沙汰していますが、久々に鵞鳥の会を開いて、痛飲したいと思います。特に今度の会は御曹子にお嫁さんを見つける集りとお考えください」

葉書の差出人は鵞鳥の会の世話役をいつもかって出ている細野という学生時代の友人である。

葉書をみていると、卒業したミッション大学の校庭や蔦のからまった校舎が眼にうかんだ。あの校庭も千駄ヶ谷の街路とおなじように、秋になると金色の銀杏の落葉で埋り、その落葉を女子学生たちがふんでいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「よく続くねえ、この会も」

私は葉書を放り出して呟いた。それは私たちの大学時代からのグループの名前で、いつもメダカの群のように落ちあって、喫茶店でだべったり、ノートを貸しあったり、一緒にスケート場に行ったり、飲みあるいた数人の連中からなっていた。

しかし大学を卒業すれば、それぞれ会社でのつきあいや仕事が大事になり、年に三、四回、顔をあわせていたのも最初の頃だけで、そのうち歳月が流れて疎遠になり我々も三十歳を越えた男たちになっていた。

その三十を越えた昔の仲間が四、五年ぶりに細野の指定してきた「ロン・シャン」という赤坂の伊太利料理店で顔をあわせた。一ッ木通りと平行して走っている路で、このあたりは夜、女装した男がうろうろしていたり、外人の娼婦が声をかけてくるので有名だった。

細野はもちろん石原が来ていた。中井もいた。武田も朝倉も姿をみせ、真中に小肥りで、頭の毛がうすくて、人のよさそうな顔をした御曹子がニコニコしながら腰かけていた。

御曹子とは我々が柳沢につけた渾名だったが、それは彼が有名な食品会社のあととりだからだけではなく、学生の頃から、のんびりとして、鈍いぐらいお人好しな性格をからかったためである。

葡萄酒を飲みながら皆は無理矢理に大学時代のなつかしい友情をそっくり蘇らそうと努力し

ていた。しかしそれぞれには微妙な感情のずれがあった。親爺の力で一流の食品会社の役職についている柳沢と私のようにコネがないために冴えない製薬会社で働いている者では学生時代の親密感をそのまま持てといっても無理だった。

「辰野はもう子供はできたのか」

と武田から急にきかれて、私は眼を伏せ、

「皆には言わなかったけど……俺、二年前に女房と別れたんだ」

そう答えると、

「そうだったのか。ごめん、知らなかった」

あわてて武田があやまり、座が一瞬しらけた。それを細野が救うように、

「でも、辰野は一度は既婚者だからな。おなじ独身でも御曹子はちがう、本当にお嫁さんの来てがないんだから」

と言って、皆を笑わせた。

「柳沢、結婚する気持はないのか」

と真面目な武田が心配そうに御曹子の顔を見つめた。

「いやァ、別に」

柳沢は眼をぱちぱちとさせ、

「ただ、適当な人がいないからねえ」
「お前の家は金持なんだから、次々と縁談が来るだろうに」
御曹子の祖父は苦学の末、イタリアにわたり、帰国後、日本人の口にあったスパゲッティを売りだして成功した人物である。戦後もその会社は次々と若者むきの食品を開発して成功したことを私たちは皆、知っていた。今は彼の父親が社長だが、ゆくゆくは御曹子がそのあとを継ぐにちがいない。
「そうでもないよ。お袋がうるさいもんだから、みんな敬遠して話があっても消えてしまうんだ」
と柳沢はまるで他人ごとのように、のんびりとした声で言った。
「へえ」
武田は生真面目な表情をさらに硬くして、
「そうかもしれんな。金持の息子には逆に俺たちにはない壁があるからな。そんなら御曹子は、好きになった女がいないのか」
「ないこともないけど」
「曖昧な返事だな。昔の話かね。それとも今のことか」
すると一同は好奇心をそそられて柳沢と武田とに注目した。どこか仔象のような感じのする

御曹子が好きになった女とは一体、どんな奴だろう。一応は聞いてみたかった。
「まあ、今といえば今だけど」
「どんな娘だ」
「どんな娘って言われても、うまく説明できない」
「じゃ、その彼女の、どんなところが好きになったんだ」
「しかし、これが好き、と言う気持なのかなあ」
柳沢は丸い眼鏡の奥から困ったような眼をして我々を眺めた。自分でも自分の感情をどう考えていいのか、本当にわからないらしかった。
「じゃ、その娘のことをいつも、考えるかい」
と細野が横から口を入れると御曹子は、
「いつも、というわけじゃないけど、時々、考える」
「じゃあ、惚れているのさ」とせっかちな武田はすぐ断定した。「どこで会ったんだ」
「病院」
「病院？　……その娘は病気なのかね」
「いや、そうじゃないよ。お医者さんだよ」
「お医者？　じゃあ、女医なんだな。その女医と、どうして知りあった」

柳沢は学生時代とおなじように、もそもそと、要領をえない説明をしはじめたが、要約すると、次のようなことらしかった。

柳沢の会社で定期検診があって、J病院から二人の医者と看護婦が出張して採血やレントゲンをとった。その時、柳沢に糖尿が発見され、病院で精密な血糖値検査を受けることになった。

「その時、ぼくの担当をしてくれたのが、その女医なんだけど」

「へえ、それだけで」

と細野がびっくりしたように、

「その女医に一目惚れしたのかい、お前は」

「いや、そうじゃないんだよ。その人が、偶然だけど……ぼくの妹の友達だってわかって……妹があらためて紹介して、そんなことやで、遊びにきてくれて色々と話をしたりして……」

柳沢の話は相変らず、しまりがなかった。

「要するに」

武田はいらいらした表情を露骨に見せながら、

「その人と結婚したいのか」

「そう言えばそうかも知れない」

「それで、どんな性格なんだ」
「いい人だ、と思うけど」
「いい人じゃわからない。じれったいねぇ、本当にお前は。そうだ。誰か柳沢のためにその女医がどんな娘か調べてやる奴はいないのか」
それから、武田は石原に、
「お前、やらないか」
「俺？　困る。今、仕事が忙しい」
と石原が手をふって逃げると、武田の視線が私に注がれ、
「辰野、お前は学生時代から柳沢の面倒をよくみていたじゃないか。それにお前は製薬会社の社員だからJ病院の医者には手づるもあるんだろ。柳沢のためにひとつ女医のことを調べてやれよ」
とおせっかいなことを言った。石原と同じように私もあわてて断わりかけた時、
「なあ」
と武田は柳沢をむいて、
「お前だって、その女医のこと、もっと知りたいんだろ」
「ああ」と御曹子はのんびりとした声で「知りたい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com